
復元する世界（ダカーポ）持つてハイスクールD×D転生する

トトロ1234

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

復元する世界ダカーボ持つてハイスクールD×D転生する

【NNコード】

N2532Y

【作者名】

トトロ1234

【あらすじ】

「この俺、芳乃連夜は、神のミスで死んでしまったらしい。「ちよつくり転生してこい。」といわれハイスクールD×Dの世界に転生する事になる。そこそこ力を貰い頑張つていく物語である。この度初めて小説を書く、トトロ1234です。何分初めてなので文字ミスや、不定期更新があると思いますが、よろしくお願ひします。

プロローグ1

「あれ、ソーリーは」

ふと辺りを見るとソーリーには豪華な服を着た男性が立っていた。

「やつと起きたか、早速だがお前には転生してもいいわ。ああ、お前には拒否権がいから。」

急に変なことを言つてくる男性。

「あなたは誰ですか。といつかソーリーは？」

「ああ、すまない説明がなかつたな俺は口キお前ら人間から見ると神様だな。」

急に神様という男

「神様？[冗談をよしてくださいよ。」

「残念なことに、冗談ではないんだがな、これが、まあ簡単に言うとお前は死んだんだ。ほれ思い出してみや、お前は車にひかれて死んだ。」

そお言うとだんだんと思い出してきた。そうだ俺あの時車に跳ねられて死んだのか。

「思い出したか、まあ今はどうでもいい、これから転生の説明をしてやる」

「転生？」

「そうだ、簡単に言うとほかの世界に行つてもうひ。まあ、タダとは言わんなんか能力をくれてやる。と言つても、もう決めてるんだが。」

「なんで能力なんかくれるんだよ。」

つか、勝手に決めんなよ。

「お前が行く世界はそこそこ危険だからな。それにお前を殺したのは、俺だしな。だから転生させるんだが。」

今なんて言ったこいつが俺を殺した！？

「まあ、そういうことだから、逝つてこい。」

「うむ、ふざけんじやねえ。」

そう言うと、突然地面に穴があいた！

一
じ
せ
ね
～
^
^

「いつたか。まあ、転生させたんだ、楽しく見せてもらおうつかな。

」

なあ、
・
・
・
・
人間。

キャラ設定 能力設定

名前
芳乃連夜

容姿

fortissimoの芳乃零二

年齢

主人公と同じ年

説明

神によつて転生され、小学生の時に能力は覚醒した。この時期には兵藤一誠は友人で、その関係で、兵藤一誠の家によく遊びに行く関係で一誠の親とは仲がいい。家族とは中学生の時に海外に行つてしまい、今では一人暮らしである。ちょうどその時に、魔術師に出会い魔力の基礎的なことは教わっていたが、まだ、完全には使いこなせない状態だが、それでも中級悪魔、堕天使、天使に負けないほどのちからである。

ステータス

筋力	B +
耐久	A
敏捷	C +
幸運	A

復元する世界^{ダ・カーボ}

対象を24時間以内の状態に戻すことが出来る能力。また24時間以内に会つた人物なら手元に呼び戻すことも可能。ただし例外としては対象の魔力に関しては戻すことが出来ない。

戦闘においてあまり役に立たない能力に思えるが、相手を強制的に召喚して、隙を作つて攻撃をおこなうという手段などにも使える。また「術式固定^{インハルト}」を併用することによって、相手の攻撃をくらつても元に戻し続け何もなかつたかのようにする技術を会得している。

神討つ拳狼の蒼槍^{エンリスヴァルフ}

無意識に擬似概念魔術兵装によつて自身の膨大な魔力を拳に集中させて繰り出す拳撃。その威力は神話魔術と互角の威力を持つ。

ブリューゲル・ブリッツ 瞬間魔力換装

かつて魔力魔術兵装と呼ばれていた戦闘技術で、自身が独学で戦闘経験と訓練で編み出した技。一瞬だけ己の魔力を爆発的に高め、自らに取り込み固定することによつて自身が弾丸のようになつて移動することが出来る身体能力の強化。時空間すらも歪めるほどの魔力爆発が発生するほどで、そのスピードは光速をも凌駕する。魔力消耗が激しいので長時間の使用には向かない。

幻想の鏡の虚像

ファンタズムミラー

この神器は、単純に自分または他の人の分身を生み出す能力。ただ実態がないため分身で攻撃する愚か物をもつことすらできない。

あの神から転生して数十年、俺は貰った能力の修行をしていた。あの神が言うにわ、この世界は危険だと言つていたが、この数十年は平和が続いている。まあ、平和が続くのはいいことなのだが。

「あ～～眠いぜ。」

今、俺は学校の通学路を歩いている。數十分、歩いたらがつこうについてしまった。さつさと教室に入ると、エロ三人組いた。

「よ、お前たち朝から元気だな。」

そう言つと振り向く三人組。

「おひ、おひおはよ。」

そう言つてきたのは、兵藤一誠、通称イッセー。こいつとは幼馴染だったりする。こいつはただこの学校に女子が多いだけこの学園に入ってきたスケベである。

「よー心の友よ、おはよ。」

次にこいつは、松田。爽やかなスポーツ少年に見えるが、変態だ。

「ふつ・・・・今朝は風が強かつたな。おかげで、朝から女子高生のパンチラが眺めたくぜ。」

キザ男のようにカツコつけているメガネは元浜。メガネを通して女子の体型を数値化できる特殊能力を持つていて変態だ。

「よー連夜、聞いてくれよ」この女子と付き合つてゐるとか夢見ているんだぜ。」

「いや、ほんとなんだつて」

「そうか、イッセー早く病院行つた方いいぞ。」「

「ちが～～～うーーー！」

「五月蠅い！ほらさつさと座れ。先生来るぞ。」

自分の席に行つて寝た。

放課後

「じゃあなお前たち。」

「おこ最近、付を合ひに悪い。」

「ナリだ。」

やつぱりやべる

「仕方ないだろ、バイトなんだから。やつぱりわなだからじやあな。」

「

そつぱり教室を出でいく

「あ～あ、遅くなっちゃった。」

そつ言いながら夜道を歩いていると、上から何か降ってきて反射的に避けた。落ちたものを見ると光の槍見たいのがあった。

「ほーお、今のを避けるか人間。」

上を見ると黒い翼が生えた男がいった。

「だが、お前はここで死ね。お前の身に神器あることを恨むんだな」

男はそつ言つて光の槍を放つてきた。急なことで避けられなかつたため貫いてしまつた。

そして男はそのまま帰らつとしたり、声が聞こえた。

「復元する世界ダ・カーポ」

「てめ、何しやがる。」

そつ貫いたはずが何もなつかたよつ立つていた。

「自分からやつてきたんだ、やり返されても文句わ言わねえよな。」

そう、膨大な魔力纏わせながら言つてきた。

その様子見ていた者にきずいてはいなかつた。

「貴様、どうやつてその傷いや、何だその膨大な魔力は！？」

そういうところ。

「はん、さつままでの威勢どうした。」

「なめるな！！たがが人間風情が！！！」

光りの槍を向けてくる男。しかし、貫こうとしたら誰もいなかつた。

「瞬間魔力換装」

声が聞こえたあと、いつの間にか後ろにいた。

「これで終わりだ！神討つ拳狼の蒼槍！！」
フェンリスヴォルフ

その拳には、膨大な魔力を込められていた！まるで存在自体喰らいつくすように。その辺周辺は塀やらガードレールや道路が無茶苦茶

に喰いあさわれたようになつた。

「やべ、やじゅぎた。一応抑えてやつたのに。」

「これ直したことやばこみな。はあ～。復元する世界^{ダ・カーポ}」

そう言つて辺りを戻す。

「それにしても、あいつはなんだつたんだろう?」

そのまま家に帰つていつた。

「はい部長、今さつき人間が墮天使を倒してしまいました。」

「人間ではありえない膨大な魔力を。」

「では、部室に戻ります。」

これが塔城子猫とうじょうしこねこが芳乃連夜に興味をもつた瞬間であった。

「ふあ～～寝みいぜ。昨日の夜せいで全然ねむれなかつたぜ。」

時間的にもいつもより早い今日はイッセーと行くか。

「さて飯でも作りますか。」

飯を食い終わったあと二軒隣のイッセー家いった。

「おーい、イッセー今日は一緒にこいつぜ。」

玄関の扉が開いたら衝撃の光景があつた。

それは、イッセーが美少女といったからである。

朝の登校俺はこれまでこれほどの視線を感じたことがない。 原因は言つまでもない、隣の奴らが原因だ。 何故あのイッセーが三年のリアス・グレモリーがイッセー家いたのかがわからない。 いつの間にか学校の玄関ついていた。

「後で使いを出すわ。 放課後にまた逢いましょう。 そこの貴方も。」

微笑みながら、そう告げてきた。

何故？俺も？

よくわからないが、そのまま教室に向かう。 そしたら一つの間にかイッセーの後頭部を殴る奴がいた。

「どうこうことだー。」

涙を流しながら松田が叫ぶ。

俺はそのままイッシュヤー団に使い席に着いた。

放課後。

「や、びつも」

教室を訪ねてきた男子を見た。イケメン王子こと、木場裕斗（きばゆうと）だった。

「で、何の用ですかね。」

不機嫌な声で言うイッシュヤー

「リアス・グレモリー先輩の使いで来んだ。」

「…………OKOK、で俺びついたらいい。」

「つか、なんで俺も呼ばれたんだ。」

いやー！

急に女子たちが叫び出した

「汚れてしまわ、木場君！」

「木場君×兵藤なんてカッソーリングは許せない！」

「ううん、もしかして芳乃君×木場君かも！」

イッセーと俺は思った。

(くわい。マジナリ)

木場の後に続きながら向かつた先は、後者の裏手だ。

木々囲まれた場所には旧校舎呼ばれる、現在使用されてない建物で
あつた。

「I.Iに部長が居るんだよ。」

そう告げる木場

それにしても綺麗だ掃除はしているところだらう。

そうしてゐるうち、目的の場所とやらこついたみたいだ。木場の足
が、とある教室の前で止まる。

戸にかけられたプレートを見る

「オカルト研究部」

なぜオカルト？

「部長、連れてきました」

「ええ、入ってきて頂戴。」

先輩は中にいるようだ

戸を開け、入ると、室内に至るところに謎の文字書き込んでいた。
そして、一番特徴的なのは中央の円

陣。あとはソファーいくつか。デスクも何台か存在する。ソファー
に座っている女の子を見た。確か一年の塔城子猫。

こちらに気づいたのか視線が合つ。

「いらっしゃり、芳乃連夜くんに兵藤一誠くん。」

木場が紹介してくれた。そしたら、ペロリと頭を下げる塔城子猫。

「食べますか？」

ようかんを差し出してくれた。

「あらがとう。」

と言つてようかんを貰つた。

そしたら水の音がきこえてくる。

よくみるとシャワーカーテンがあった。って、シャワー付いた部室
なのか！

水をとめるなど

「部長、これを。」

奥にだれかいるのか

「ありがとう、朱乃。」

カーテンの奥で着替えて着替えてくるよつだ。イッセーをみると案
の定、鼻を伸ばしてた。

「…………いやらしい顔。」

ぼそりと呟く声。俺もそう思つ。

「ごめんなさい。昨晩、イッセーのお家にお泊りして、シャワーを
浴びていなかつたから、いま汗を流したの。」

つて、やっぱ泊まっていたのかよ！

視線が先輩の後方に映る。確か姫城朱乃ひめじあけの

「あらあら。はじめまして、私、姫城朱乃と申します。どうぞ、以後、お見知りおきを。」

「」顔で挨拶される

「」これはどいつも。兵藤一誠です。」「」はじめましてー！」

「芳乃連夜です。」「」はじめまして。

俺たちは挨拶を交わす

それを、「うん」と確認するリアス先輩。

「これで、全員揃ったわね。芳乃連夜くん、兵藤一誠くん。いえ、イッセー。」

「は、はい」

「はい」

「私たち、オカルト研究部はあなた達を歓迎するわ。」

「え、あ、はい。」

「はい」

「悪魔としてね。」

「うやうやしく、俺の平和が崩れそうです。」

「粗茶です」

「あ、どうも。」

ソファーに座る俺たちへ姫島朱乃先輩がお茶を入れてくれた。

ずっと、飲み。

「「うまいです。」」

「あらあら。ありがとうございます。」

嬉しそうに笑う姫島朱乃先輩。

「朱乃、あなたもこひらに座つてくれない。」

「はい、部長。」

と腰あるす姫島朱乃先輩。

「単刀直入に言つわ。私たち悪魔なの。」

・・・と、とても単刀直入ですね。

「信じられない顔をね。でもあなたたち昨夜、黒い翼の男を見たで
しょう?」

確かに。俺はそれを見ている。って、イッセーお前も襲われたのか!

そこからいろいろな話をされた。なんでも、堕天使と悪魔は地獄の
霸権を争っているとか、堕天使と悪

魔を問答無用に襲いかける天使。しかも女子と付き合つているとか
夢が本当だったとか。しかも、女子

と付き合つていた子が堕天使とか、俺たちが殺されそうになつたの
は神器を持つていたから。次に神器

について説明された。なんでも、俺達の中に宿つていいという規格
外の力らしい。

「田を閉じて、一番強い力を出せる想像して。」

イッセーにいつ

「一番強い存在……。ドラグ・ソボールの空孫悟かな……」

「そのまま、思いっきり力を解放する感じでやりなさい」

「ドリゴン波！」

突然イッセーの左腕が光り出した！そして光がやんだあとには左腕に赤い宝玉の付いた赤い籠手のよう

なものがあった。

「な、なんじゃこりゃあああああああー！」

叫び出すイッセー

「うわ～、なんかすげーぜ」

「さて、次はあなたよ、芳乃連夜くん。」

「え、俺もドラゴン波を打てと、あの馬鹿じやあるまじ。」

「馬鹿つて、何だよ馬鹿つてー。」

「すまない、変態だつたな。」

「へ、否定できないー。」

「馬鹿だ。えっと、一番強い力を出せる想像すればいいんですね？」

「ええ、そうよ。」

「わかりました。やつてみます。」

目を瞑り、想像した。

自分に眠るもう一つの力を、

箱の中から取り出す感じで、

解き放す！

目を開けると、大人一人分ぐらいの鏡が出てきた。みためはほんの少し古い長細い鏡。

「これが俺の？」

「それが神器。貴方たちのものよ。一度ちゃんと発現ができれば、後は貴方たちの意思でどこにいても発動可能になるわ」

この鏡が神器・・・？

「あなたたちはその神器を危険視されて墮天使たちに殺されそうになつたの」

「イツセー瀕死の中、貴方は私を呼んだのよ。この紙から私を召喚してね」

その紙には、こう書かれてた。

『あなたの願い叶えます！』

そんな謳い文句と奇妙な魔法陣の描かれたチラシだった。

「これ、私たちが配つてあるチラシなのよ。これは、私たち悪魔を召喚するためのもの。最近魔方陣を書くまでして悪魔を呼ぶ人はいないに。」うして、チラシとして、悪魔を召喚しそうな人間に配つているの。あの日私たちの使い魔が繁華街でチラシを配つていたの。それをイッセーが手にした。そして、墮天使攻撃されたイッセーは私を呼んだ。私を呼ぶほど願いが強かつたんでしきうね。普段なら眷属の朱乃呼ばれるんだけれど

なにイッセーは、瀕死重体だつたと。

「召喚された私はあなたを見てすぐに神器所有者で墮天使に害されたのだと察したわ。イッセーは死ぬ寸前だつた。そこで私はあなたの命を救うこととしたの。

「悪魔としてね。あなたは私の眷属として生まれ変わったわ。」

え、何イッセー 悪魔になつたの！

「改めて、紹介するわね。裕斗」

「僕は木場裕斗。兵藤一誠くんと芳乃連夜くんと同じ一年生つてことはわかっているよね。僕もあくまです」

「・・・一年生。・・・塔城子猫です。・・・悪魔です」

「三年生、姫島朱乃ですわ。今後もよろしくお願ひします。これでも悪魔ですか。うふふ

「そして、私が彼らの主であり、悪魔であるグレモリー家のリアス・
グレモリーよ。家の爵位は公爵。よろしくね、芳乃連夜くんイッセ
」

Life 4 (後書き)

感想をお願いします。

「ちょっと、待ってくれませんか。なんで俺が呼び出されたのがわからないのですか。確かに俺は神器を持つてましたけどそれで呼び出された理由がわからないんですけど？」

「そ、う、どうして俺が呼び出されたのがわからないんだ。

「あら、そうだったわね。あなた昨夜、一度墮天使を葬つてるでしょ？それに神器を使わずに辺り一面壊れたもの元に戻したでしょ？子猫から聞いているわ。どうやってやったのかしら。」

「復元する世界^{ダ・カーポ}ことですか？」

「そう、復元する世界^{ダ・カーポ}言うの？どうゆうものか教えてくれるかしら？」

？」

「復元する世界^{ダ・カーポ}対象を24時間以内の状態に戻すことが出来る能力。また24時間以内に会った人物なら手元に呼び戻すことも可能。ただし例外としては対象の魔力、生命力に關しては戻すことが出来ない能力です。」

「それに、墮天使を倒した方法なんてただ魔力を拳にのせて放つただけですよ。」

そつ、説明する。

「そつ。私があなたを呼んだのは勧誘するためなの。」

「勧誘ですか？」

「ええ、あなた悪魔になつてみないかしり?」

「俺ですか?」

「そつあなたは素質もあるし魔力もある。どうかしら?」

そつ言つてくるコアス先輩

「す」し、考へてもいいですか?」

「ええ、いいわ

そう言って俺たちは帰った

「それにしても、芳乃君の能力は興味深いわね。そう思わない皆？」

「いつまでも嘘に騙つ

「そうですね、それに彼は魔力を封印してましたわね。」

「それに、普通は魔力を拳に乗せて放つても、あそこまで辺りを破壊することなんてできないし。それほど莫大な魔力を拳に乗せていたことですね」

「そうね、もしかしたら私より多いかもしれないわ。どうしたの子猫？」

「いえ、・・・何でもあつません。」

「あらわづ、それにしても彼らは面白こわね

帰り道イッセーが急に話しかけてきた。

「なあ連夜^{ダ・カーポ}? 復元する世界だっけ? そんなのいつから持つてたんだ

よ。

「小学生の時だなこれが使えたのは。」

「やうなのが、それにしても今まこうこうあつて疲れたぜ。」

「同感だ。俺ビビリよしきな

そつこま頭こある」とは勧誘のことだった。

「一緒にやるひばり魔。部長の話だと爵位を貰えればハーレムを作れ
んだぜ。」

馬鹿なことに気が付いてる

「興味がないね。あ、少し考えてみるよ。」

「アハカ」

やつ話をこじて家にこじりしまった。

「じやあなイッキーおやみ。」

「ああ、連夜おやすみ。」

家に帰つたあとすぐ寝てしまつた。

Life5（後書き）

感想をお願いします。

学校の帰り、自分は悩んでいた。リアス先輩からの勧誘の返事をどうすればいいのか、それにイッセーのことも心配だ案外あいつ危険なことにも巻き込まれるしな俺も巻き込まれるが。しかし、爵位も興味がないんだよな。と考えながら歩いていると

「はわいー。」

ん？ 突然の声。

後ろから聞こえると同時にボスンと何かが転がる音がする。

振り向くとそこにはシスターが転んでいた。

「おい、大丈夫か？」

と、手を差し伸べた。

「あう。すみません、急いでたので」

外国语で話してきた

そう思いながら手を引いて起き上がらせる。ふわっ。風でシスターのホールがとんでいく。

ストレートの金髪の髪が露になる。そしてシスターの素顔へ視線が

移動する。

俺は一瞬心を奪われる。田の前の金髪美少女がいる、あまりの綺麗で引き込まれそうになつた。

しばし俺はその女の子を見惚れてしまった。

「あ、あの・・・どうかしたんですか・・・?」

「あ、すまん。えっと・・・」

言葉が伝わない。

くそ、見惚れてたとはいえない。と思つていたら道を歩いてくるイッセーがいた。

「おい、イッセーか、ちょっとひきこみに来いー。」

「うおーなんだよ連夜かよ。で、そいつの金髪美少女は誰だよ。まさかお前また・・・」

「またつてなんだよまたつて。ただそこで歩いていたら転んでいたから助けただけだ」

「やうなのか、それでまたフラグを立てたんだな!」

「フラグてなんだよ

それから僕のシスターとはなしていたらどうやら僕の街の赴任してきたらしこ。どうやら言葉が伝わらなかつたらしくてもよつていたらしい。俺は普通に英語を話せるからいいんだがしかしあのイッセーが英語の時間に英語を話していくならクラスのみんなはたいへんおどろいていた。あとから聞いたら悪魔になると相手が聞こえる言葉になるやうだ。

「教会ならしつてこるかも」

と俺が言ひシスターが田を輝きながらはなしでくる。

「本当にですか！ ありがとうございますーーー」れも主のお導きのかげですね！」

涙を浮かべながら、俺たちに言ひついでほんとに可愛いなこの子。

そして教会に向かつ途中、公園の前を横切る。

「うわああああああ」と

その時、子供泣き声が聞こえた

「だいじょ「ばふ、よしくん」

お母さんがついているから、だいじょうぶだろう。転んだだけだし

「おいおい

子供のそばにシスターは近寄った。

「大丈夫？男の子なんだからこのくらいの怪我で泣いてはダメですよ

シスターが子供のあたまを優しくなでる。

次の瞬間シスター手のひらから光が発せられ子供の膝を照らしていくでないか。

なんだあれ？魔力か？よく見れば子供怪我がみるみる消えていく。傷を治しているのか？

俺の脳裏を過ぎるものがあった

神器

特定の人間に宿る規格外の力

あの光を見てから体全体が疼くそれはイッセーもおなじだった。

いつの間にか怪我がふさがっていた。これはすごい、これが神器の

力。

「はい、傷は無くなりましたよ。もう大丈夫」

子供の頭をひとなですると、俺たちのほうへ顔を向ける。

「すみません、つい」

彼女わ舌を出してえ笑う

「ありがとうございますーおねいちゃん」

「ありがとうございますーおねいちゃん。だって」

イッセーが通訳する。

「…その力……」

「はい。治癒の力です。神様からいたいた素敵なものなんですよ」

治療を終えたアーシアの顔はどこか寂しげなものだった。
さすがのイッセーも流石にこの状況に混乱している

会話はそこで一旦途切れ協会に向かう数分進んだところに古い教会が存在した。

イッセーを見ると顔が真っ青汗も出ている。そういうばイッセー悪魔だからここからはやく立ち去ったほうがいいか。そう思つて俺は言つ

「じゃあ、俺たちいくよ。」

「待つてください一直到りまで連れてきたお礼を教会で・・・」

「いや俺たちも急いでいるから」

「・・・でもそれでは」

困る彼女

しかし二度と断らなければイッセーが危ない。

「俺は芳乃連夜。連夜と呼んでくれ。でこいつは兵藤一誠。俺の幼馴染、みんなからイッセーと呼ばれている。君は？」

「私はアーシア・アルジェントと言います。アーシアと呼んでください！」

「おへ、じゅあなアーシア。」

「じゅあなシスター・アーシアまた会えたらいいね

「はーー連夜せんイッセーせんからなずまたお会いしまじょひー。」

頭を下げるアーシア

俺も手を振つて別れを告げる。

そして彼女とあんなことになるとは今俺はおもつてもいなかつた

Life6（後書き）

どうだったでしょうか？感想をお願いします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2532y/>

復元する世界（ダカーポ）持つハイスクールD×D転生する
2011年11月17日18時26分発行